

俺とモノズの物語

三丁目の木村さんの親戚の息子

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ガレキはチャンピオンの住む街、ハロンタウンに生まれた青年だ。

ホップやユウリと共にすくすくと育つたがガレキはどうにもポケモンが苦手だつた。

幼いころに頭をポケモンに噛まれたトラウマで恐怖感を覚えてしまうのだ。

そんな折、ブラッシャータウンで駅員として働いていた彼の元に、ダンデを倒し新チャ
ンピオンとなつた幼馴染のユウリが訪れた。

思つてたより早くサザンドラの孵化厳選が終わつちゃつたから余つたタマゴあげよ
うと思つて、突然そんなことを言い出すユウリに困惑を隠しきれないガレキであつた
が、やたらと押しの強い彼女に押し切られモノズのタマゴを受け取つてしまふ。

こころでポケモンに慣れとこうよと笑う彼女に言われるままにタマゴを育てることになつたガレキの新しい物語が始まる。

目

次

第十二話

第十三話

第十四話

第十五話

83 79 68 63

第一話
第二話
第三話

第四話

幕間 ガレキ

第五話

第六話

第七話

第八話

第九話

第十話

第十一話

52 47 43 39 33 29 22 19 15 12 8 1

第一話

俺はポケモンが苦手だ。

「おはようござります、今日はどちらまで？」

「エンジンシティまでおねがいします！　おとなが…にまいり…」
「かしこまりました。はい、どうぞ」

「ありがとうございます！」

威勢の良い声が駅舎に響く。七歳かそこらの子供だろうか。後ろでにこにこと見守る親御さんに「ちゃんとかえたー！」と嬉しそうに駆け寄る姿に、自分の子供の頃を思い出しても少し頬が緩んだ。

「エンジンシティというと…」

「ええ、ジムチャレンジを見に行くんです。今日は休みが取れたので、カブさんの試合を生で見たくて」
「あのねあのね！　カブさんすっごいんだよ！　ゴーってね！　ボーってね！　ほのおがすごくてね！」

嬉しそうに目を輝かせる少年の姿に、彼の父親は嬉しそうにほほ笑んでいた。バトルスタジアムに観戦に行くというのは、このガラルでは一番の娯楽と言つてもいい。その分スタジアムのチケットを取るのは難しかつたりするのだが……きっと彼はいい父親なのだろう。子供の笑顔のために仕事のスケジュールをなんとかやりくりして、こうして家族そろつてジムへ向かうのだ。

「エンジンシティ行は九時十五分発です、良い一日になるといいですね」

「ありがとう、君も良い一日を」

駅の改札へと向かう彼らの足取りは軽やかだ。本当に楽しそうで、見ていてこちらも嬉しくなつてくるようだ。

……最も、彼らのことをうらやましいとは思わないが。

俺は……ガレキは、ポケモンが苦手だ。嫌いなのではない。苦手なのだ。

可愛いと思う事や、かつこいいと思うことはある。だが自分から触れ合いに行こうとは思わない。

小さいころに庭先で遊んでいたら野生のポケモンが家の前を通りかかり、恐れを知らなかつた当時の俺は警戒もせずに近づいて噛まれたのだ。

少し歯形が付くくらいの大したことはない怪我だつたが、幼い俺には中々の衝撃で、

それ以来ポケモンに近づくのが怖くなってしまったのだ。

その点幼馴染のホップやユウリは凄いと思う。ともにハロンタウンで生まれ育つた仲だが、俺と違つて彼らはポケモントレーナーとしての頭角をメキメキと現し、チャンピオンリーグに出場するに至り、ユウリに至つてはダンデさんを倒して新チャンピオンになってしまった。

この前のダイマックス騒動も彼らがどうにかしたというし、その活躍には目をみはるばかりである。

対する俺はと言えば、今日もこうしてブラッシャータウンで駅員の仕事を黙々とこなし日銭を稼ぐ毎日だ。

それが不満だとは言わないが、ともに幼少期を過ごした友人たちが活躍するのをテレビで眺めているだけというのも、焦燥感に似た不思議な感覚にとらわれてしまい、なんだか嫌な気持ちになる。

もしも俺がポケモンが大好きで、彼らのようにトレーナーの道を選んでいたら、また少し違う今があったのだろうか。俺も、彼らの隣で……

いや、よそう。こんなことを考えていたつてどうしようもない。俺は俺の仕事をこなすだけだ。

「……で、なんでお前がここに居るのかな……？」

「あ、おかえりー。遅かつたね」

「遅かつたねじやないが」

「プラツシータウンの端にある俺の家に帰ると、件のチャンピオンがリビングでくつろいでいた。

「いやほら、そろそろ帰省しよつかなーって思つてたらガレキがこちらに住んでたの思い出したからさ、寄つてみたのだよ。えへん」

「……随分暇そうなチャンピオンだな……。つていうか鍵はどうした」

「ガレキのお母さんが「息子はあんまり友達作らないから……不審死してたらいけないしホップ君とユウリちゃんに合い鍵渡しとくわね」つて」

「友達少ないので認めるが独居老人じやないんだぞ俺は……」

俺はやれやれとため息をついてソファに腰を下ろした。母さんも母さんだがユウリもユウリだ。一体俺のことを何だと思つてているのか……。

「で、何の用だよ」

「用がないと来ちゃだめなの？」

「ダメじやねえが一報入れろ。あとホップはどうした」

「ホップはダンデさんに会いにバトルタワー登つてるよ。ここを踏破して会いに行くんだってはりきつてた」

「普通に会いに行きやいいんじやねえのかな……」

まあ二人とも相変わらずの様で安心した。幼いころはよく三人で遊んだものだが、最近はどうも遠くに行つてしまつたような気がしていたのだが……こうして話すとあの頃と何も変わつてはいない。俺は少し微笑んで立ち上がつた。

「紅茶でも淹れるよ、オボンティーでいいか?」

「ヒメリでおねがーい」

「団々しいなお前あれ高いんだぞ……まあいいや、ヒメリだな」

「あーそれと今日は用事があつてきたんだけどさ」「

「自由すぎねえかお前」

思わずつっこけそうになつてしまつた。ポットの中にティーパックとドライヒメリのみを入れながらリビングの方に目をやる。

「用事がなかつたら来ちやいけないのかつて聞いただけで用事がないとは言つてないんだよね〜」

「ハア……で、用事つて?」

文句を言うのも諦めた俺がカップとポツトを持つて戻ると、ユウリは横に置いていた

バッグの中から大きな何かを取り出した。

「これあげようと思つて」

「……おいユウリこれもしかして」

その物体に見覚えがあつた俺は嫌な汗をかきながら目の前のユウリに尋ねた。

「うん、ポケモンのタマゴ！」

「持つて帰つてくれ」

「ええーなんでよー」

「なんでよじやねえよお前俺がポケモンが苦手だつて知つてるだろうが」

そう言い返すとユウリは「知つてるけどどうかした?」と言わんばかりに首を傾げた。
こいつは……。

「いや苦手なのは知つてるけどさ、ポケモン苦手だと生きにくくない? そろそろ慣れ
ておかないとと思つて……ほら、タマゴからなら愛着も湧きそうだし……どう?」

「本音は?」

「ザザンドラの孵化巣選してたら思いのほか早い段階で6V完成してタマゴ余っちゃつ
たから信頼できる奴に押しつk……託そうと思つて」

「えつ……いやごめんちよつとわかんない」

「まあいいから受け取つときなさいつて」

そう言つてユウリは笑顔で俺にタマゴを押し付けてきた。バスケットボールの大きさのそれはズシリと重く、俺はそれを取り落としてしまわないようにしつかりと抱え直した。

「……俺に、育てられるのかね」
「私は大丈夫だと思うけどね。ガレキはポケモンの事怖がつてるけど、なんだかんだで優しいから」

「……そういうもんかね」

俺は抱えたポケモンのタマゴを右手で軽くなる。とくんとくんと確かな脈動を感じ、何とも言えない気持ちになつてそのタマゴをぎゅっと抱きしめた。

「……わかつたよ。こいつは俺が引き取る」「やつぱりそう言つてくれると思つてたよ！　あと色々ポケモンと暮らすのに必要な物持つてきたから置いていくね！　分かんないことがあつたら私がホップに電話して！　じやあねー！」

「あつおいユウリ茶くらい飲んで……行つちまつたよ」

嵐のような女だ。こういうところは昔から変わつていない。俺はひとまず部屋を片付けることにした。

このタマゴについては、また後で考えることにする。

第二話

あれから一週間がたつた。未だにタマゴの孵る気配は無い。

「やあ！ 元氣にしているかガレキくん！」

「おはよう！ ポケモン飼い始めたって聞いたぞ！」

騒々しい音に目を覚ます。玄関の方がにぎやかだ。俺は眠い眼をこすり、適当な上着をひつつかんで羽織った。ベッドの中で一緒に転がっていたタマゴを割れないようにベッドの真ん中に置き直して玄関へとむかつた。

「ダンデさん、ホップ。朝からどうしたんです？」

「ポケモンが苦手だつて泣いてたお前がポケモンを飼つてるつて聞いて飛んできたんだぞ！ とうとう克服できたのか!?」

「うおつ凄いでけえ声……いや別に克服できたわけじやねえけどさ……」

朝っぱらから元氣のいいホップの声にぐあんぐあんと頭を揺らしながら、俺は二人を家の中に招き入れた。

「成程！ ユウリにしてやられたというわけだね！」

「そうだったのか……でも、断らなかつたつてことは前に進もうとしてるつてことだな！ 偉いぞ！」

「いや別に偉か無いけど……」

「……」
「うず、とオボンティーをする。二人はどうやらユウリから話を聞いてやつてきたらしい。昔からよく世話を焼いてくれる兄弟だつたが、今でもそれは健在らしい。元チャンピオンとガラルを救つた英雄がわざわざ駆けつけてくれることに一抹の喜びを感じながらも、俺はこの際に気になつていたことを聞くことにした。

「それでですね、ユウリからはタマゴを受け取つたんですけど、これが中々孵化らないんですよ。何か知りませんか？」

「……ユウリの言うところによるともう一週間は経つはずだが……ガレキくん、君はちゃんとタマゴを外に連れ出してあげているか？」

「連れだ……え？」

俺が怪訝そうな顔をすると二人はやつぱりなといつた風な顔で説明してくれた。

「ポケモンのタマゴというのは不思議なもので、人がそれを連れ歩くことで孵化が促進されるらしい。むしろそうやって連れ出さないと成長に悪影響が出ることもあるそうだ。」

「そ、そういう大事なことは早く言つてくださいよ！ だ、大丈夫なんですかあいつは

!?

「大丈夫、大丈夫。そうそうダメになつたりしないよ」

「そ、そなんですか……？」

安心したように息を吐きだす俺を見て、ダンデさんは嬉しそうに笑つた。
「いやあ、そこまで心配するなんて、なんだかんだで君もあの子のことを大切に思つて
いるんだな！ 安心した！」

「……そりや、苦手つてだけですからね。恨みだなんだがあるわけじやないですし、元気
に生まれてきてほしいと思ひますよ」

そういうと、二人は顔を見合わせてふふっと笑つた。

「よつしや！ そういうことならタマゴも連れて色々買いに行くぞガレキ！」

「え？ いやこの前ユウリが色々置いていつてくれたんだけど、あれじや足りないのか
ホップ」

「あれはトレーナー用のばつかりだぞ。トレーナーのポケモンはすぐにレベルが上がつ
て成長するから必要ないけど、レベルの上がりにくいバトル無しのだと成長がゆっくり
だから色々必要なんだぞ」

「そ、そなんのか？」

知らないことばかりだ。まあポケモンとかわりの少ない人生を送つてきたんだし

仕方ないといえばそうだが、自分の無知に驚かされる。というか、

「あいつ……思考が完全にトレーナーのそれに……」

「まあ孵化厳選とかしてたらしいし感覚が完全にマヒしてたんだと思うぞ」

「大丈夫なのかあいつは……」

幼馴染がバトルジヤンキーになつていくのを肌で感じながらそう呟くと二人はまあユウリだから……と肩をすばめて見せた。本気であいつがどこに向かつているのかと心配になつたが、そんな俺をよそにダンデさんはすつくと立ちあがつて言った。

「まあ彼女についてはいいとして、モーモーミルクとか、柔らかいタオルとか、いろいろ揃えないといけないからな、タマゴを連れて買い物に行こう！ シヨツピングタイムだ！」

第三話

「うーん、いっぱい買っちゃつたな……」

日も傾き始めたころ、俺はダンデさんとホップと共に家路を歩いていた。両脇に買い物袋を抱え、背中に荷物を背負い、赤ちゃんの抱っこひものようなものでタマゴを抱えて歩いている。このひもはホップがくれたものだ。カバンに入れて歩くより、より身近に感じるだろうとのことだつたが、確かにシャツ越しにとくんとくんと微かな脈動を感じる。それは出かける前よりも、元気になつているように感じた。

「ただいまーっと」

「いやーははは。けつこういっぱい買つたぞ、ガレキ」

「お前は何を買つたんだよ……」

家につき、荷物を下ろしているとホップが嬉しそうに彼の買い物袋から色々取り出していた。

「何つて、俺の相棒に使う新品のブラシと……キャンプの新しいランプと……レトルトカレーにカップ麺に……いろいろだぞ！」

「そつかー色々か……」

トレーナーはキャンプ用品を買うのか……そう言えばワイルドエリアに向かう電車にのるトレーナーたちはみんなキャンプ用品持つてたなーと遠く思いをはせているとダンデさんがふいに俺の肩を叩いた。

「ガレキくんガレキくん、タマゴ、タマゴが」

「うえつ……あ！」

何のことかわからず一瞬困惑したが、顔の下の方から聞こえたぱきぱきという音に気づいて胸元を見やる。

「あ、た、タマゴにひびが！」

「やつぱり出かけたのがきいたんだぞ！ ガレキ！」

「ちょ、ちょまつ、待つて！ 今タオルしくから！ つてああつ！ ひもがほどけな
……」

玄関でわたわたとごたつく俺。非常に情けない話ではあるが、こういう場に立ち会つたことが無いのだ。ましてやこのタマゴから生まれてくるのは俺のポケモンで、当事者であるという事実がさらに俺をパニックに追いやる。

「ああっせめてタオルを床に敷いて——」

べき、とひときわ大きな音が響き、青色の小さな鼻先がひょこりとからの隙間から覗いた。

ぴい、ぴい、と鳴き声がして、俺は震える手で胸元のタマゴに手を伸ばし、割れた殻を取り上げた。

「ぴい……？」

「あ……」

じつと、小さな顔がこちらを見上げていた。

「おめでとう」

後ろから、ダンデさんの声が聞こえる。

「君の初めてのポケモンが今、生まれたんだ」

「あ、あ……」

怖い筈だつた。苦手な筈だつた。

でも今日の前にあるそれは、小さな小さな顔で、こちらを見上げていて。俺は怖がることも忘れ、殻ごとその子を抱きしめていて、

「おはよう、モノズ。……はじめまして、だな」

開きっぱなしの玄関から、温かい夕日が俺達を包み込んでいた。

第四話

「……」

「……があ？」

モノズが無事に生まれたのを見届けた二人が満足げに家を去つてから數十分。俺は何とも言えない空気の中モノズと見つめあつていた。

ついさつき、生まれた瞬間はテンションが上がつたというか生命の神秘に立ち会つてハイになつっていたというか。とにかく恐怖を忘れてこの子に触ることができたのだが、時間が経ち冷静になつた今は沸々と恐怖感が心の底から湧き上がつてきたのである。

モノズ。そぼうポケモン。目が見えないので手当たり次第に体当たりしたり噛みついたりして周りの様子を把握する。食べられるものは何でも食べて、おいしかつたものは匂いを覚える習性がある。動くものにかみつくのでうかつに近寄ると危険とされている。

図鑑を読んだ時の一連の説明文がふつと脳裏をよぎる。そぼうポケモンとはなんなのか。図鑑に粗暴とか言われるポケモンは人里にいていい代物なのか。そもそもか

つに近寄ると危険とはつきり明記してあるではないか。あの馬鹿（ユウリ）は何を思つてポケモンが苦手な男にこんな危険なポケモンを差し向けたのか。やはりあいつは鬼畜の氣があるのか。

そんな思考が脳内をぐるぐると駆け回る。ちよつとしたパニック状態だ。俺がここから逃げ出さないでいられるのは、ここが俺の家でここから逃げ出したとしても逃げ込む先がないという事と、流石にいい年してポケモンにビビって逃げ出すのはいかがなものかと俺のわずかな理性が訴えているからだろう。

しかし、しかしだ。このままというわけにはいかない。いかないのだ。生まれたばかりのあの子の体を洗つて、ミルクを飲ませて、温かくして布団にでも入れてあげなればならない。これは飼い主として当然果たすべき責任だ。

だというのに情けない俺はモノズに近づけずにいた。怖いのだ。幼いころ、ポケモンに噛まれたときの恐怖が脳にこびりついて離れてくれない。その恐怖がねつとりと体にまとわりついて、俺の意思を鈍らせた。

情けない。本当に情けない。でも仕方がないじゃないか。十数年かけてどうにもならなかつたんだ。それがこんなことでどうにかなるんなら俺はこんなに苦労はしていない。

そんなことを考へていてもモノズはぐぐ…と体を持ち上げた。よたよたと覚束

ない様子だつたが、ふらふらしながらも何とか四足で立ち上がり、あたりを伺うようにきよろきよろと首をふつて、一步踏み出そうとして――こけた。

「……びえ」

ええええん、と。小さのどから引き絞るような鳴き声がした。こけていたかつたから、というような声ではない。もつと切実な、胸の内に訴えるような、悲痛な声。その様子を見て、俺はハツとして息をのんだ。

そうだ、モノズは目が見えないのだ。

殻を破つて生まれて、目も見えず、冷たい床の上に一人。どれほど恐ろしかつただろう。どれほど心細かつただろう。

ああ、嫌になる。こうしてはつきりと突き付けられなければ、こんな簡単なことにも気づけず自分に言い訳ばかり聞かせている自分が嫌いだ。

あの子には俺しかいないのに。あの子を抱きしめてやれるのも、あの子の不安を拭い去つてやれるのも、ここには俺しかしないというのに。

「……ツモノズ！」

俺はたまらず駆けよつて、震える小さな命を抱き上げた。

「ごめんな…ごめんな…そうだよな…お前も怖いよな…俺なんかよりお前の方がよっぽど怖かつたよな…」

「ぴ？」

ぎゅうっと抱きしめて、俺は縋るようにつぶやいた。

モノズは、突然触れられてびっくりしたのか、少しじたばたともがいて、俺の指にかぶりとかみついた。

「はは……くすぐつたいな」

ぎゅむ、ぎゅむと甘噛みされる指先は、記憶にこびりつくあの痛みではなく、ほのかな力強さと、確かな温かさを伝えていて……。

「うん、もう怖くないよ。大丈夫。平気さ。怖くない……」

俺は言い聞かせるようにそう独り言ちてモノズの頭を撫でた。

この言葉は、モノズに向けての言葉だつたか、それとも。

幕間 ガレキ

えきいんのガレキ

ハロンタウン生まれ、ブラツシータウン在住の青年。現在はブラツシータウン駅で駅員として働き日銭を稼いでいる。

幼馴染のホップとユウリとは二つ年が離れている。彼自身は二人のことを弟か妹のように思っているが当の本人たちはタメの友人だと思っている。「年上つて感じがしない」だそうだ。つらい。

幼いころに近所のカジリガメに危うく頭蓋骨を粉碎されたことがトラウマになりポケモンが苦手。特に噛みつくものに対しても露骨な警戒の姿勢を見せる。だが本人はポケモンのことが嫌いというわけではなく、なんとか克服したいと思っていた。ちなみにスマホロトムは問題ないそうで、「ロトムは噛まないし…」だそうである。スマホロトムがポケモンというより家電に近い感覚なのも起因していると考えられる。

住居はブラツシータウンの離れにある一軒家である。分かりやすく言うとブラツ

シータウンの博士の家に向かう道から見える奥の畑の方にある家に住んでいる。家は小さな二階建ての1LKの風呂トイレ別。借家。最近の悩みは家を出ようとすると草むらのワンパチが玄関の前で遊んでいて出られなくなることらしい。

変なところで真面目なきらいがあり、頼まれたことは断れない性質で今回もタマゴを引き取ることになってしまった。文句を言いつつもとりあえずイエスといつてしまふその性格のせいで常に胃痛が絶えない。そんな性格を見透かされ、ダンデ、ホップ、ユウリの三人からは頻繁におせつかいを焼かれている。それを恥ずかしく思いつつも悪い気持ちはしないようだ。

駅員という事もあって、意外と交友関係は広い。ハロントウンには駅がないため、プラツシータウンの駅を利用する者は多く、二つの町に住むほぼすべての住人と知り合いである。プライベートでは口は悪いが、公私はきつちり分ける上、目上の人物には礼儀正しいのであまり角は立たない。コミュニケーション能力が割と高いのでどんな相手とでもすぐに打ち解けるがポケモンを連れている場合露骨に表情が硬くなるのでたまに弄られている。

ガレキの名前の由来は瓦礫ではなくガレージキットから。モノづくり全般、特に手芸が好きだつたりする。D I Yで棚とか椅子とか作っちゃうタイプの人類。他の皆はポケモン勝負にはまっていたが、そういうわけにもいかなかつたからかポケモンのかかわ

らない範囲で多趣味である。ただ、ジムバトル観戦はよくするらしい。「目の前にいるわけじゃないし……」らしい。こちら辺から彼の「本当は好きだけどそれはそれとしてやつぱり怖いから近づけない」という悲哀が見て取れる。ちなみに彼の一押しのジムリーダーはカブさんである。

第五話

「うん、風呂入ろう、風呂」

俺はモノズを抱きかかえたままそう独り言ちた。

「ひい？」

モノズが俺の声に反応して、ぬつと顔をこちらに向けた。目は見えていないが耳と鼻はいいのだろう。モノズはすんすんと鼻を鳴らしていた。

「風呂だ風呂。卵から孵つたばつかでなんかちよつとぬつちよりしてるからなお前。風呂入つてさっぱりするぞ」

「うが」と

何のことかはわかつていらないだろうが、俺の声の明るい調子から楽しいことだと思つたのかモノズがうれしそうな声をあげる。モノズは成長すると80cmくらいになるらしいが生まれたばかりのこの子はタマゴとあまり変わらない大きさで、俺は片手で抱き上げることができた。まだ歯も生えそろつていらないようだし、先ほどからずつと噛まれている指もふやけたくらいでいたくはない。これならなんとか大丈夫そうだつた。これは怖くない。

「ちょっと待てよー、確かポケモン用のせつけんとブラシも買ってきたはずだつたからな……」

モノズを左手で抱え、俺は右手でガサゴソと買い物袋を漁る。入れる時にきちんと仕わけていたからか、すぐに見つかっただ。

「よし、行くぞモノズ。初めての入浴タイムだ」

「があ？」

まだよくわかつてなさそうなモノズを連れ、俺は風呂に乗り込んだ。

俺はまずタライに浅くお湯を張る。人間よりやや体温の高いモノズが風邪をひいてしまわないように、少し熱めのお湯だ。

「ふん……こんなもんかな」

指をつけて具合を確かめた後、俺はモノズをゆっくりとタライに近づけた。いきなりお湯につけないのは、生まれたばかりで、しかも目の見えないモノズをびっくりさせないようにするためだ。

俺は足先からゆっくりとお湯につけるが、ちよんとお湯に脚の先が触れた瞬間にモノズがびくっと体を震わせた。不安そうにじたばたするモノズを落ち着かせるために、脇

の辺りを支えていた左手をすっと滑らせてモノズの口に俺の指をくわえさせた。すると、モノズはふにふにと俺の指を甘噛みしはじめ、おとなしくなった。

ずっとくわえて離さなかつたからもしゃと思つたが、やはりモノズは俺の指をくわえていると安心するらしい。おしゃぶりみたいなものだろうか。噛まれるのがトラウマな俺としては背中に嫌な汗が伝つていたが、これくらいは耐えられる。歯が生えていいからか、噛まれているという感じがあまりしないのも大きいだろう。

俺はモノズが俺の指をしやぶつている間にモノズをタライに張つたお湯につけた。四センチくらいしかないので、全然体は使つていなかつたが、これでいい。俺は自由な方の手でお湯をすくつてぱちやぱちやとモノズの体にお湯をかけた。びっくりさせないよう足先からゆづくりと、お湯の感覚に慣らしていく。

「ほうら、気持ちいいか？」

「ううう……」

何を言つているのかはわからなかつたが、モノズは俺の指をくわえた口から気の抜けた鳴き声を発した。これは多分気持ちいいという事でいいのだろう。

俺は買つてきた毛の柔らかいブラシを取り出してせつけんを泡立たせた。片手でやるのはしんどかつたが、モノズが大人しくしてくれていたのもあって、俺は特にトラブルもなく洗い始める事ができた。

モノズの体はドラゴンタイプにしては珍しく、鱗だけはなく毛にもおおわれている。肩回りから顔にかけての黒いところが毛だ。俺はぬつちよりとするモノズの体に、丹念にブラシをかけていく。青い鱗の部分はしつかりとブラシでこすり、こびりついた粘液を落とす。黒い毛の部分は、指ですべく様にして石鹼の泡でしつかりと洗う。

モノズの青と黒の体が白い泡で覆われても、モノズは俺の指を離そそうとしなかつた。そんなに気に入つたのだろうか。今はいいが、歯が生えて来てからが少し怖い。

そんなことを考えながら、俺はモノズの体にシャワーをかけて泡を洗い流した。お湯にはもうすっかり慣れたのか、シャワーを気持ちよさそうに浴びていた。

「つくし！」

参つた。モノズを洗つていたら自分の体を冷やしてしまつた。俺は鼻をこすりながら隣のバスタブを見やる。お湯はもう張れたみたいだ。

「綺麗になつたし、お前も風呂に入るか？」

「がう？」

よくわかつてなさそうな声をあげるモノズ。いやまあ分かれというほうが無理があるが。どちらにせよモノズが俺の指を離そとしないので、俺はモノズを抱えて湯船につかる。

「つああ～……やっぱこれだな……」

思わずオッサンのような声をあげてしまった。だがこればかりは仕方がない。俺は風呂が好きなのだ。特に仕事アガリに入る風呂は格別で、一日の疲れがどつと吹き飛んでしまう。毎日風呂に入るためには、わざわざ風呂のついた家を探してハロンタウンからプラツシータウンに引っ越してきた位だ。風呂はいい。人生が豊かになる。最高だ。

とはいえるモノズはどうだろうかと視線をモノズにうつすと、モノズは俺に抱えられたまま湯船につかり、前足でお湯をばちやばちややつて遊んでいた。ポケモンは飼い主に似るというが、この子も風呂好きなようで何よりである。

「あ、そうだ。ちょっと失礼して……」

そこでふと、ユウリの言葉を思い出した俺はモノズをこちらに向かせ仰向けに抱き上げる。左手で支えて、右手で腹の真ん中あたりをさすり、「それ」を探る。

「おつこれだな」

「すっ

「ぎや?!」

モノズが驚いたような声をあげる。まあ股間に指を突っ込まれたのだから驚く気持ちわかるが。これは仕方ない事なのだ。

ユウリは、ポケモンが生まれたらまず性別を確認しておくようにと言っていた。ピカチュウのように雌雄の区別がぱつと見で分かつたり、性器の様子が分かりやすいワンパ

チなどと違つて、ドラゴンタイプのモノズはオスもメスも性器が鱗で隠された穴の中に収納されていてぱつと判別がつかないのだ。どうするのかユウリに尋ねたところ、「腹に手を当てて上から下へゆっくり鱗をさすつて違和感のある鱗が性器を隠してる奴だからそこに指突っ込んでなんか手ごたえがあつたらオス、何もない穴だけだつたらメスね」らしい。確認方法が乱暴すぎる。いやこれしかないというのも理解できるのだが。

「お前は女の子かー、そうか……なんか悪いことしちゃつたな……」

「うるる……」

オスだったらまあ男同士だしいいかと思つたが女の子となると少し悪いことをした気分になる。俺は抗議するようにどすどすと俺の腹に頭突きするモノズに「ごめんごめん」と謝りながら頭を撫でた。撫でながら、親指を口に突っ込むとモノズはすぐに甘噛みし大人しくなる。

……もしかして俺の体からは何か甘いものでも出てるのだろうか。昔からよく噛まれたり舐められたりしゃぶられたりするがここまでくると不気味だ。俺の体はポケモン的にはごちそうなのかも知れない。怖い。変な想像は止めよう。

「ん?」

どす、と急にモノズが俺の方に頭をぶつけてきた。まだご立腹なのかと思つたが、よく聞くとすーすーと寝息が聞こえた。寝てしまつたらしい。

「おいおいおい……風呂場の寝落ちは命に関わるぞ？」

俺はふつと微笑んでモノズを抱き上げた。寝るには少し早いが、今日は色々あって俺も疲れた。今日はもう寝ることにしよう。

第六話

「……寝苦しいと思つたらお前か」

「……ふう」

目の前で間の抜けた面を晒していたのはモノズだつた。小型ポケモン用のベッドをユウリに押し付けられていたので毛布を敷いてその中に入れてあげていたのだが、どうやら夜中に起きて俺の布団に潜り込んできていたらしい。変なにおいがしてなにやらはながぬつちよりと湿つてるので、俺の鼻をかじつていたらしい。鼻がふさがつて息苦しくなつて目が覚めてしまつたようだ。何故鼻を……と袖で鼻を拭ついながら考えていると、「ふう……」と鼻提灯垂らしながらモノズがばたばたと手足をばたつかせた。口をパクパクさせて何やら探しているようだ。

「……」

俺はふとシーツを棒状に捩つてモノズの口に突つ込んでみた。ぐにぐにと二、三回噛んで、ふえつと吐き出す。お気に召さなかつたようだ。今度は指を突つ込んでみる。モノズはそれをぐにぐにと噛み、舌で俺の指をぐいと動かし位置を調整して、満足したようすに呴えた。

「……なんで俺の指なんだ……」

やつぱりなんか甘いのでも沁み出しているのだろうか。ちょっと不安になってきたが、まあ考えてもしようがない話だ。

「まだ四時か、起きるには早いけど寝るのも早かつたからな。起きて色々準備……つて指咥えられてたんだつたな俺……」

起こした体をまた横に倒し、もぞもぞと布団の中に潜り込む。今朝は冷え込んでいるようで、まだ暖房をつけていない我が家では布団の中は中々の居心地だった。

今日は休みだし、二度寝するのもありだろう。

「……があ？」

「ん？ 起こしちまつたか？」

布団の中でもぞもぞとモノズが体をよじる。目が見えていないからか、俺の指をがつちりと咥えたまま前足で俺の腕をペしペしとたたいて、手繰るように俺の体に身を預けてきた。

「ひいょ」

横になつた俺の腕の中で、モノズは俺の腕に抱きつく様にしてまたすやすやと寝息を立て始める。

「……まあ、どうせ二度寝するしいいか」

身動きが取れなくなつてしまつたが、寝るつもりだつたので問題はない。目元は毛で隠れて伺えないが、暗がりの中でも幸せそつだとわかるいい笑顔だ。

「……」

この子を見ていると、自分は本当はポケモンが怖くないのではないかと思つてしまふが、それはこの子がまだ生まれたばかりで小さいからだろうと思う。ポケモンは成長が早いし、きつとあと数日もすれば立派な歯が生えそろうだろう。それにこの子はそぼうポケモンのモノズだ。目が見えないからあちこちぶつかつて危ないし、なんでも噛みつく習性もあるらしい。この子もいつかきっと強い歯でなんにでも噛みつくようになるだろう。何故か俺の指がお気に入りらしいし、そうなつた時俺は今みたいに落ち着いていられるだろうか。昔のトラウマを思い出して、この子を怖がつてしまふんじやないだろうか。そう思うと辛い。誰かに怖がられるのは……嫌なものだ。この子にそんな思いはさせたくない。させたくはないが。自分がそう簡単に変われるようにも思えないのだ。

「……ぴゅう」

間の抜けた声を漏らして、モノズは俺の腕の中で笑つた。何かいい夢でも見ているのだろうか。とても幸せそうだ。

「……まあ、いいか。そん時はそん時だ」

今はただ、この子の笑顔を見ていいよう。いつかこの笑顔を守る為に、自分が変われる日が来ると信じて。

第七話

朝だ。すがすがしい朝だ。空はカラツと晴れ温かい風が麗かな陽気を運んでくる。外からは元気のいいココガラの鳴き声が聞こえてくるし、きっと今日はいい一日になるだろう。

「朝つぱらからよだれでびしょびしょになつてなけりやあな……」

俺は疲れたようにそう独り言ちた。

二度寝。そう二度寝したのである。それはもうすやすやと。モノズの体温が高く抱きしめて寝ると大変気持ちよく眠れたのである。が。が、だ。

すつと視線を下に移す。そこにいるのは幸せそうな寝息を立てるモノズだ。……俺の服をガジガジとかじっているが。

「こいつあれからずつと俺をかじり倒してたのか……まだ歯が生えてないからあれだつたが……生えてからどうすんだこれ」

すつと遠い目をしてしまう。この子の歯が生えそろつたころ俺はまだ人の形をしているだろうか。

そんなことを考えながら着替えようとベッドから降り……られない。モノズはがつ

ちりと俺のシャツを噛んでいた。

「……」

ひとまずシャツを脱いでベッドを降りた俺はクローゼットから着替えを出そうとして——ユウリと目が合つた。

「昨夜はお楽しみでしたね？」

「お前正気か？」

口元に手を当てて「キャー」とかほざくユウリに白い目を向けながらタオルを引っ張り出して顔と体を拭つた。

「えつ、いやだつて上半身裸で謎の液体に塗れてるし……」

「だつてじやねえよ!? つていうかどういう発想してんだよお前はよ……」

服取るからそこどけよ、とユウリを追い払いつつ俺はクローゼットからシャツを取り出して身に纏う。柔軟剤のヒメリの花の香りが鼻腔をくすぐつた。

「で。一体何の用だよ、こんな朝っぱらから」

怪訝そうにユウリを見やる。この前ユウリは合い鍵を俺の母から受け取つてはいるといつていたが、だからつてこんな朝早くから人の家に来るので。何か大切な用事でもあつたのかと思つたのだ。が。

「いやまあ特にどうつてことのほどは無いんだけど」

「もしかしてチャンピオンって暇なのか？」

「おうおういきなり失礼だなガレキさんや」

思わず本音が口について出てしまった。この正直者め！ と適当に自分を諫めて現実逃避しつつ、ちゃつかりと人のベッドに腰掛けるユウリの頭に軽くチョップを入れて立ち上がらせた。

「まあいいや。で、お前朝飯は食つてきたのか？」

「食べてなーい。たかるつもりで来たー」

「お前な……ハア。ホットケーキでも焼いてやるからリビングで待つてな」

家が近所だつたこともあり、昔からユウリはよくうちに朝飯を食べに来ていた。まさか自立してからもおしかけてくるとは思わなかつたが、追い返す理由もないでの俺は階段を下りてキッキンへと向かう。

「やたつ。ガレキさん大好きー」

「勝手に言つてろ……」

後ろからひよこひよことついてきていたユウリが適當な世辞を言つてゐるがこれも昔からだ。未だに「好きだよー」とか言つてれば喜ぶとでも思つてゐるのだろうか。そういうところはまだ子供というかなんというか……。

俺はため息をつきながらホットケーキミックスの袋を開けた。うちのホットケーキ

はそんな本格的な奴じやない。市販されてるホットケーキミックスを袋に書いてある通りに調理した簡素なものだ。一人分焼き上げるのに、二十分もかかるない。

俺は皿を二つ持つてリビングの机に並べる。そういえばこの部屋は結局リビングなのかダイニングなのかという疑問が一瞬脳裏をよぎるがすぐに霧散する。二階の方でガタンと物音がしたからだ。

「うわっ、何の音?」

「二階には俺の寝室しかないが……ってああ! 起きたのか!」

俺は持つていた物をひとまず机の上に置いて階段を一段飛ばしで駆け上がった。

ドアを開けると、思った通りモノズが泣きそうな顔で辺りの物にかみつきまくっていた。目を覚ますと俺の匂いも声もしないから混乱して手あたり次第にかみつきまくつて俺を探していたのだろう。

「モノズ! 俺はこっちだぞ」

目の見えないモノズに分かるように手をパンパンと鳴らしながら呼びかける。

「!!」

するとモノズは咥えていたベッドの脚から口を離し、一目散にこちらに駆け寄ってきた。

「あはは…そんなにさみしかつたか…悪いことしたな」

「ぎ、ぎや、」

俺が抱き上げるとモノズは先ほどと打つて変わつて笑顔で一声鳴いて俺の腕にかみついた。二、三回ガジガジと噛むと、安心したのかふにふにと甘噛みし始めた。

「ぴい」

嬉しそうに鼻を鳴らすモノズを見て一息ついた俺が立ち上がり下に戻ろうとすると、部屋の入り口から信じられないものを見るような目でこちらを見つめるユウリと目が合つた。

「…えない」

「ど、どうしたんだよユウリ……」

不審がつて声をかけると、ユウリは「いやありえないって！」と声を荒げた。

「生まれたのつて昨日だよね!? モノズはそぼうポケモンで気性が荒いから普通こんなに早くなつかないよ!? っていうかなんで噛まれても平気そうなの!? トラウマだつたんじやないの!?

「なんでなついてるのかは知らんが噛まれるのはトラウマではあるぞ。ほら今もちよつと冷や汗かいてるし」

「冷や汗程度ですんでるじゃん！ 前は牙が生えてるポケモンが近寄つてくるだけで逃げ出してたじやん！」

まあそうだけど……と俺は言葉を濁した。そう言われてみれば昨日からこつち、モノズに対する恐怖心はガツツで耐えられているのだと思つていたが、それにしてはあんまりにも早く噛まれることに慣れている気もする。前までのオレなら一回噛まれたあたりですべてを諦めていた筈だ。……。

「まあ俺も成長したつてことだろ。なーモノズ」
「ぴ？」

俺の腕の中で俺の腕を甘噛みしていたモノズはくにっと首を傾けた。
「なんでそんな仲良くなつてるのぉ…………！」

「どうしたんだよ急に……ほら、ホットケーキ冷めるし下降りて食おうぜ」
「うう……なんで……どうして……」

がっくりとうなだれるユウリ。なにか気に障る事でもあつたんだろうか。よく分からぬ奴だ。俺はモノズを連れて一階に下りた。

第八話

「ハア……計画が台無しだよお……まあいい事なんだけどさあ」

朝食を食い終えたユウリは机に突っ伏して何やらブツブツぼやいていた。

「計画つてなんだよ。それがダメになつたから機嫌悪いのか?」

モノズに飲ませるモーモーミルクをポケモン用の皿に注ぎながら俺は尋ねた。ユウリは、のつそりと上体を起こし、こちらに顔を向ける。

「いやさ? 私とホップとで色々計画してたのよ。ガレキをどうにかしてポケモンに慣れさせようつてね? あえて噛みつき癖の強いモノズを渡してショックを与えて後々の処置に対する体制をつけさせようと思つてたんだけど……」

「俺が思いのほかモノズと一緒にやれてるから計画がどん挫したと?」
俺がそう聞き返すとユウリはピツとこちらを指さした。

「そ。まあいい事なんだけどね……いい事なんだけどお……ついでに色々からかつてやろうと思つてたからさあ」

「おい待て何だその歯医者の待合室とかに置いてありそうなやつは」
「ごとつと机の上に置かれたものを見て思わず前のめりになる。何という名前なのか

分からぬが。あの歯医者さんが歯の状態を説明するときとかに使いそうな大きな入れ歯みたいな模型だつた。

「ああこれ？ これでガレキをガブガブやつて噛まれる事への恐怖心をだね……」

「んなもんで噛まれたらむしろトラウマ増えるわ……つていうかそんなのどこで買つたんだよ……」

「そりやもうあれよ。チャンピオンのツテで……」

「どういうツテなの……」

ガチガチと模型の歯を力ち鳴らすユウリを見て、俺はげんなりとした声を上げた。
「まあでもあれかな。私のあげたタマゴから生まれたモノズが人懐っこかつたんだろう

ね。結果オーライだし全然問題ない」

そう言いながらモーモーミルクを飲み終えたモノズに手を差し出すユウリ。顎のし
たでも撫でてやろうとしたのだろうが、指先が触れた瞬間にモノズは飛び上がるよう
にして逃げ出し傍にいた俺の脚の後ろに身をひそめた。

「あれ……？」

二人して間抜けな声が出た。モノズは俺の脚にすがるようにしてすんすんと鼻を鳴
らしている。嗅ぎなれない匂いを警戒しているのだろうか。だがしかしこれは……

「おかしい……てつきり人懐っこい性格だからガレキのこと強く噛まないしこうやつて

大人しいのかと思つたのに……

「思いつきり警戒してよなこれ……」

ユウリはしばらく腕を組んでうんうんと唸つた後、モンスター・ボールを取り出した。「ガレキ、試したいことがあるからちよつとそこに立つて」

「？ あ、ああ」

言われた通り立ち上がる。モノズは不安そうだったが、ソファの上に座らせた。

「で、何を——」

「キテルグマ！ 君に決めた！」

「え？」

ぐもー、とピンクと黒で視界が埋め尽くされる。何故ここでキテルグマ？ という疑問を呈する暇もなく、俺はその剛腕でぎりりと抱きしめられた。

「がああああ?!」

「ぴい!?」

「戻れ！ キテルグマ！」

ピシュンと音を立ててキテルグマはユウリの持つボールへと戻る。俺はぎしぎしと痛む肋骨をさすつた。折れてはいないようだ……。

「成程……見立て通りね」

「何がだよ！　お前キテルグマによる年間死亡事故件数知つてやつてん……がふつ
大声を出したせいで軋んだ骨に振動が行き俺はその場にへたり込んだ。こいつは一
体何を考えているんだ……。

訳も分からずユウリをにらんでいると、彼女は笑顔でこちらに話しかけてきた。

「知つてる？　キテルグマの抱擁つて親愛表現なんだけど、今のキテルグマ…はなこつ
て言うんだけど、はなこは気難しくて全然初見の人に心を開かないんだよ」

「……それがどうかしたのか？」

よろよろと体を起こしてソファに座り直した俺に、ユウリは告げる。

「ガレキはポケモンの事苦手に思つてるけど…ガレキはポケモンに好かれる才能がある
みたいだね！」

「はあ……？」

第九話

「どういうことだ？」

痛む体をさすりながら聞いた。ユウリはキテルグマの入ったモンスター・ボールをしまいながら答えた。

「どういうことも何も言つた通りよ。ガレキはきっとポケモンに好かれる性質なの。気難しいはなこやそぼうポケモンのモノズが懷いているのが私の根拠ね」

「それ根拠になつてんのか……？」

訝しげにそう訊ねると、ユウリは「だつて思い出してみてよ」と切り返す。

「ガレキがポケモン苦手になつたキツカケのカジリガメいるじやない？ 飼いならされてない野生のポケモンにかじられてトラウマ程度で済むのは普通に考えてちょっとおかしいよね？」

「……まあ、カジリガメにやられたわけだからな……普通にかみ砕かれて死んでてもおかしくはないが……」

言われてみるとそうだつた。ポケモンを持たない子供は基本的に町や村から出てはいけないことになつてている。特に草むらに入るのなんてもつてのほかだ。ポケモンは

人間のパートナーであるのと同時に、脅威もある。子供をさらうポケモンや命を奪うポケモンもいるし、そうでなくともポケモンは力が強い。事故が起ることも少なくなのだ。

……そう、あれはまぎれもなく事故だった。普通なら死んでしまっていてもおかしくないほどの……。

「つまり何か？　あれも一種の親愛の表現か何かだつたと？」

「多分ね……そう考えれば色々合点もいくし。ほら、朝仕事に行く前に野良のワンパチによく絡まれてるじやない？　あれだつて冷静に考えたらおかしいよ。普段は草むらから出てこないので……」

「……」

黙り込んでしばし考えこむ。もしかすると本当にそうなんだろうか。自分が怯えていただけで実は自分はとても懐かれていたと？　いやしかし……。

「そうは言うが好きだから傷つけるって例もあるし安心材料にはならないだろ」「自分一人の物にならないから殺して永遠に自分だけのものにするねつていう女子よくいるしね……」

「いやそれはそうそういねえだろ!?」

とんでもないことを言い出すユウリに思わず目を丸くするが、当のユウリは「いや結

構見かけるけどねえ」と何やら恐ろしいことを呟いていた。そんな修羅の国だつたのか
ガラルは。ブラツシーとハロンからあまり出る機会がないので知らなかつた…。
「ま、ガレキがポケモンに好かれるタイプだつたからつて今すぐどうなるつて事でもな
いんだけどね」

「まあ…そりだらうな。俺自身の問題なわけだし」

うーんと唸る。例え好いていてくれても俺の受け取り方をどうにかしなければどう
しようもない話だ。…と、ユウリが何やらにやにやとこちらを見つめているのが見え
た。

「…どうしたんだ？」

「いや、なんていうかね。ガレキは大丈夫だと思うよ？」

「はあ？」

訳が分からず怪訝な顔で見つめ返すと、ユウリは俺の膝の上でぐつとしがみついてい
たモノズを指さした後笑つた。

「この調子ならそう遠くないうちに変われるよ。そんな気がする」

「…そりかねえ」

ユウリの笑顔に勢いで流されそうになるが、俺は少し口角をあげて返した。ユウリは
いたずらっぽく笑うと、「大丈夫大丈夫」と念を押してドアの方を指さした。

「んじや、そろそろ行こつか！」

「え？　どこに？」

急なことについて行けず間の抜けた声をあげると、ユウリはポケットから取り出したそれをこちらにぐつと突き出して構えて見せた。

「その子のモンスター ボールを買いに行くのよ！」

第十話

「ボール……？」

「えついや流石にモンスター・ボールを知らないとか……」

「ボールは知ってるよ失礼だな……。なんでトレーナーでもないのに買いに行くんだつて話だよ」

そう訊ねると、ユウリはやれやれといった様子で答えた。

「今日は休みだけど明日は普通に仕事だよね？ 仕事の間その子どうするつもり？ 家にひとりぼっちにさせるつもりじやないよね？」

「あー……そういうことな。わかつた、準備するから待つてくれ」

俺は一人暮らしで、平日の日中…シフトによつては夜間も家を留守にしている。その間ずっとモノズを家にひとりでいさせるわけにもいかないだろうという事だった。ボールの中に入れて身に着けておけば、仕事中も一緒にいられるし安心だろう。

別に急がなくてもいいよーとこちらに手を振るユウリにとりあえずモノズを預け、俺は二階の自室へ向かつた。もう外は肌寒い季節だ。俺はクローゼットから取り出したジャケットを羽織り、机の上の鞄を掴むと一階に下りる。

「わりいわりい、待たせ、た、な……」

「ああっガレキつ！ ちよ、ちよつとこの子とつて！ とつて！」

「ぐるるるるる……」

一階に下りるとなぜかユウリが腕をモノズに囁まれて半泣きでこちらに助けを求めていた。

「……」パシャパシャパシャツ

「ガレキ!? なんで今写真撮つたの!? しかも三回も!?!?」

「いや…珍しい光景だつたからつい……」

撮影した写真をダンデさんとホップとソニアさんとユウリの両親に迅速に転送しつつ俺はモノズを掴んで引きはがす。じたばたしていたモノズはすんすんと鼻を鳴らすと途端に大人しくなり「びい」とこちらに顔を向けた。匂いで俺だとわかつたのだろうか。

と、ユウリがものすごい顔でこちらを見ているのに気づいた。

「ど、どうした…？ 大丈夫か？」

「歯…生えてないけど腕持つていかれるかと思つた

「えつそんなに強く噛まないだろこの子」

「うるる」

試しにすつと手を口の中に差し込んでみるが、優しくぐにぐにと甘噛みされるだけだ。

「な？」

「なつて言われても……ハア。やつぱり私の予想通りみたいね……はなこだつて私やホップには全然懐かなかつたのにガレキにはファーストコンタクトと同時に鰯折りに掛かつてたし……」

ユウリの言葉にうへえつと顔をゆがませる。

「鰯折りは嬉しくないけどな……つていうかお前の場合あれじやないか？ 僕にキテルグマけしかけるの聞いてたから……」

「……あー。もしかして私ガレキの敵認定されてる？」

「ぐるるるる……！」

「うわあ凄い敵意」

モノズの鼻先に手を近づけたユウリはすつと手をひつこめた。いつも飄々としているユウリにしては珍しく冷や汗をかいている。そこまで痛かつたのだろうか。

「いや噛まれるつて怖いね……これちつちやいころにカジリガメに頭やられたらそりやトラウマにもなるわ……」

「分かつてくれたようで俺も嬉しいよ……」

唸り声をあげるモノズの頭を撫でてなだめながら笑つて返す。囁まれるのは誰だつて怖いものである。

「んじやあまあ俺がモノズを抱いて行くとして…どこに買いに行くんだ？」

「あ、ああうん。こつから一番近いのだとエンジンシティかな」

「エンジンシティ？」

電車に乗らないといけない距離の街の名前を出され、俺はユウリに聞き返した。

「ボールならフレンドリイショップで事足りるんじやねえか？」

「……はああああああ」

なんだかすごく馬鹿にされた気がする。ものすごくおおきなため息をついたユウリは大げさにばつばつと手を振つて主張する。

「いい？ ボールってのは一生ものなの！ 一度ボールに入つたら基本ずっとそのボールなの！ ある意味家と言い換えても差し支えないの！ そんな大切な物を近所のフレンドリイショップで済ませようなんてダメでしょ！」

「……ユウリが普段使つてるボールは？」

「一山いくらの特売で買ったやつだけど…」

「お前面の皮厚すぎだろ」

しかしユウリのいう事も分からぬではない。聞いた話だとボールによつて中の居

心地も変わつてくるらしいし、仕事中はずつと入つてもらうわけだからなるべくいいものを吟味しようという事だろう。

「言いたいことは分かつたけど、なんでエンジンシティなんだ？」

「あそこはジムのある一番近い町だからね。あいつもいるだろうし……」「あいつ？」

俺が訊ねると、ユウリは少し困った顔をして答えた。

「モンスター・ボールの専門家……ボールガイよ」

第十一話

ユウリに連れられて訪れたのはエンジンシティを一望する巨大な建物、エンジンジムだつた。のだが、何故かユウリは中に入らず入り口の右手側の方に立つてゐる不審な男の前に俺達を連れてきたのである。

「ボルボル～これはこれは新チャンピオンじやないボルか～ガラルリーグの人気者ボルガイになんの用ボル～？」

「あつもしもし警察ですか？　ええ、エンジンシティのジム前に不審な男が：男？　まあ多分体系的に男だと思われる人物がですね：」

「待つボル！　何を流れるように警察に通報しようとしているんでボルか!?　ボールガイはいたつて善良なマスコットキヤラクターボルよ!」

正面からがつと肩を掴まれ凄まれる。怖い。微妙に俺より身長が高いのと変声機を通しての声が怖い。

「ガレキ、この怪しさがキグルミを着て徘徊してゐるようなのが今日会いに来たボールガイ、モンスター・ボールの専門家よ」

「うそだろ…こいつが…？」

「いや…流石にいい歳した大の男にそんな全力で引かれると流石のボールガイも傷つくボルよ…」

がつくりと肩を落とし項垂れるボールガイ。そんなにショックだつたのだろうか。と、俺は一度落ち着いて目の前の不審し——ボールガイに目を向ける。ガタイはいい。かなりいい。割と身長はある方だと自負していた俺よりも身長があるし、体格もがつちりとしていて安定感がある。で、問題は全身を覆う白いタイツとその上に着られた半袖短パン、そして何より精神に訴えかけてくる感じの恐怖をあおるこの頭部だろうか。デザイン自体はリーグ公式マスコットキャラクターの物なのだが、デフォルメされたデザインの彼と違い、目の前にいるボールガイはガタイのいい体に頭部だけ元に準じたデザインのが乗っているせいで異物感が凄い。あと圧も凄い。

「おいチャンピオン。お前んとこのリーグのマスコット着ぐるみ作るんならもつと胴体部分もだな…」

「いやその人公式じゃないから」「え？」

思わず変な声が漏れる。

「その人はリーグの公式マスコットキャラクターのコスプレをしてリーグ公式ジムの前に立ってるだけの、リーグとは全くの無関係の一般人だよ」

「あもしもし警察ですか？　ええ、はい。いや本当にヤバイ不審者がですね…」

「ちよつとおおお!?　何かさつきからやけに通報することにためらいがなくないかボルウ!？」

「いやだつて：何か起きてからでは遅いし：外見で判断したくはないけど聞いたところ外見以外もやばいし…」

「否定しにくい正論を返すのやめてほしいボルよ!？」

ボールガイが悲痛な叫びをあげる。

「話進まないからそこらへんでやめてあげてガレキ。やつてることはやばいけど悪い奴じゃないから」

「悪い奴じゃないのか？　ならまあいいけど…」

「……なんか釈然としないけどまあ通報しないでくれるならそれでいいボルよ…」

疲れたような声で肩を落とすボールガイ。さつきから見ていてもしかしたらこいつは意外と常識があるのかも知れない。まあ常識があるのにこんなことして居のなら余計にやばい奴なんだが…。

と、ボールガイはその丸い頭の頬をパンと両手で叩き、「ウシツ」と気合を入れ直してこちらに向き直った。

「ところで今日はボールガイに何の用ボルか？　モンスター・ボール、特にガンテツ

ボールについてならボールガイにお任せボルよ！」

「うおつ切り替え早いな…」

さつきまでの落ち込みようとは打つて変わつて陽気に手を振り話すボールガイに、ユウリが本題を切り出した。

「私の友人のポケモンのボールを見繕つてほしいの。モノズなんだけど」

「ああ、友人だつたボルか。てつきりチャンピオンが彼氏でも連れてきたのかと思つたのでボルが…モノズボルね？ ちょっと待つボルよ…」

そう言つてボールガイは顔の被り物をすっぽつと外した。

「えっ!?」

そして彼：いや、彼女はボールガイの被り物の中から二、三個小型化したボールを取り出すともう一度被り物を被つた。

「モノズは目の見えないポケモンボルからね…ダークボールとかが落ち着いていいと思うボルが進化してサザンドラになつたら開眼して視力を得るから長期的なことを考えてスーパー やハイパーもいいと思うボル。でも純粹な中の居心地だけで言えばやつぱり値は張るけどゴージャスボールが鉄板ボルね…つてどうしたボル？ そんな顔して黙り込んで…」

「え、あ、いや…それ往来で外していくもんなのか？ つていうかお前女だつたのか…」

？」

それを聞くとボールガイは「あー…」と被り物に手を添えた。

「ここだけの話、ボールガイは一人じやないんボルよね。一応背格好とか体格をそろえるためにこのタイツの下に肉襦袢着たりして皆統一してたボルが中身は割と色々なんだボルよ。あ、これオフレコで頼むボル」

「え、えええ……それ今首とつて大丈夫だつたのかあんた…」

「ああ、良いんボルよ別に。公認のスタッフとかじやないんで特に規定とかもないボルし……まあ今は全然人通り無かつたんでひよいと外して中からボール取り出したボルがもちろん子供たちの前じゃ外さないボルよ？ 子供たちの夢は守らないといけないボル」

「お、おう…」

何故当然のように被り物の中にボールが入つてているのかについては全く触れることが無かつたが、彼女はいたつて普通にボールの特性を俺に説明し始めた。

「モンスター・ボールは主に三つの生産元があるボル、大企業のシルフカンパニーとデボンコーコーポレーション、あとはジョウトの職人ガンテツ・ボルね。モンスター・スープーハイパーがシルフ製で、他の流通して特殊なボールが大体デボン製、市場にめつたに出回らないボールがガンテツ製・ボールだと思つておけばいいボル。まあウルトラ・ボールと

かはアローーらの財團が開発したらしいけどこころじやほとんど手に入らないので特に気にしなくていいボルね。ほんとはお兄さんにもガンテツ爺さんの完全なハンドメイド品だから貴重でしたいところなんだボルけど：ガンテツ爺さんの完全なハンドメイド品だから貴重で今手持ちが無いんボルよね。ちなみに昔はぼんやりつていう木の実に特殊な装置を手作業で取り付けてボールを作っていたんだボルが、この流れを継承したのがガンテツボールになるわけボル。いやー今手元にないのが惜しいボルね：。で、トレーナーとかだとボールのデザインをパーティの構成のコンセプトと絡めてボールを決めたりもするのでボルがお兄さんはトレーナーじゃないみたいボルしやっぱり懐きやすくなるゴージャスボールでボルかねえ：チャンピオンはどう思うボルか？ つてチャンピオン？ どうしたボルか急に静かになつたボルが：」

「……」

なんか申し訳なくなるくらい本当に丁寧に解説してくれるボールガイが、手を止めて隣のチャンピオンに顔を向ける。

「…つた

「ボル？」

「知らなかつた…ボルガイつて女の子だつたんだ…」

「いや他の町の担当とかは大体男ボルよ…？ まあボルガイは謎が多いボルから、

ボールガイ自身自分以外のボールガイの素性は詳しく知らないんだボルけどね…」

「やべえなボールガイ…どういう集団なんだ…」

「ボールの楽しさとガンテツボールの奥深さを伝える集団ボルよ」

「なぜガンテツ…」

「ガンテツはいいものだボル…」

しみじみとつぶやくボールガイ。そこまでか。そこまでなのか。少しガンテツボー

ルとやらに興味がわかないでもないが今はモノズのボール選びに集中である。

「俺はトレーナーじゃないし、仕事中この子を入れて身に着けておきたいんだ」

「ああそういう感じボル？ ならガンテツがあつたとしてもおすすめできなかつたボル

ね」

「どういうことだ？」

「ガンテツボールは物は良いんだボルが何しろぼんぐりを加工して作つてるから他の

ボールみたく持ち運びやすいサイズに小型化できなんいんだボル…仕事中も身に着けたいならやつぱり小型化は必須ボルよ」

「なるほど…でもボールの形だと收まりが悪いな…持ち運ぶのになんか便利なアイテムとか無いか？」

「ああ、それならこれがあるボル」

ボールガイはズボンのポケットから長方形のケースを取り出して目の前で開いて見せた。ふたを開けるとそこには二つ小型化したボールが収まっている。

「これは携帯用の懐中ボールケースボル。六つまで入つてかさ張らないし良い感じボルよ」

「へえ：いいなこれ。じゃあケースはこれにするとしてボールか：おすすめはダークとゴージャスだつけ？」

「モノズボルからね：ダークボールの中は全体的に薄暗くて光が苦手な子とかにおすすめのボールボル。モノズは目が見えないっていうけど、実は目の上に鱗と毛が重なつて見えないだけで光は感じてるボルから、あんまり明るいよりはちょっと薄暗くて光の刺激が少ないダークボールの方が居心地はいい筈ボル。ゴージャスはもうゴージャスボルね。とにかく何でもかんでもゴージャスで中の居心地は高級ホテルに例えられるボル。ただよつと値が張るボルね：」

「成程……なあモノズ、お前はどうちがいい？」

「ぴ？」

一応モノズに聞いてみるが、モノズはよくわかつてなさそうに首を傾げた。まあわかるはずもないか。俺は改めてボールガイの持つボールに目を移しボールを得選ぼうとしたとき、「ぴ！」とモノズがボールを咥えあげた。真っ白なボールである。

「これがいいのか？」

「うるる♪」

「あーこれはプレミアボールボルね。性能はモンスターボールと変わらないんボルが、白地に赤のラインというそのシンプルかつスタイリッシュなデザインで多くのトレーナーから絶大な支持を得るボールだボル。これを選ぶとは中々ツウなモノズだボルね。これでいいボルか?」

「ああ、モノズが選んだんだ、俺はこれでいい」

「わかったボル。プレミアボール一個お買い上げボルね」

俺は財布から金を払い、白いボールを受け取った。シンプルという言葉がこれほど似合うボールもそう無いだろうというデザインだ。かつこいい。

「あ、そうだ。これはおまけにあげるボルよ」

「これは…いいのか?」

「いいボルよ。初回サービスってやつボルね」

「ああ、なら有難く頂くよ」

俺はそう言つてボールガイからモンスター、ボール用のケースを受け取つた。試しにポケットに入れてみるが、携帯していく違和感のないサイズで、収まりもいい。いいものだ。

「で、後はモノズをボールに入れればいいんだよな?」

「そうボル。ボールのボタンを一回押すと小型化が解除されて元の大きさに戻るボル。戻つたらもう一度ボタンを押して、普通なら投げて充てるんだボルが、これは手で掴んだままこつんとぶつければ行けるボル」

「ああ、やつてみる」

俺はモノズを地面の上に下ろし、プレミアボールのボタンを押す。ブウンと軽い振動がボールから伝わり、ボールは手のひら大のサイズに變った。そのままもう一度ボタンを押し、俺はモノズの頭にそれを当てる。するとボールは光を放つて開き、モノズがその中に吸い込まれた。俺の手の中のボールは、一度だけ揺れて、テインと音を立てる。無事ゲットできたようだ。

「これでボールへの登録が完了したボル。おめでとうボルね」

「おお…これがゲットか?なんか変な感じだ」

手のひらに収まるほどのボールの中に先ほどまで抱きかかえていたモノズが入っているのかと思うと妙な感慨がある。一言で言うなら「かがくのちからつてスゲー」と言つたところか。

「じゃあ今日はこんなところボルね。また何かボール関係で分からぬことがあるたら頼つてほしいボル。一応向こう数年はこここの担当だから大丈夫だと思うボルよ」

「ありがとう…向こう数年はつてことは異動とかあるのかボールガイ…」

「ボールガイは色々謎なんだボル…自分も細かいところまでは把握してないしまあガンテツボール大好き集団とだけ覚えておけば十分ボルね」

ボールボルボルと不気味な笑い声（笑い声：？）をあげるボールガイに別れを告げ、俺は荷物をまとめて駅に向かう。そろそろ次の列車が出る頃合いだ。今日は色々あつたが無事にボールとケースが手に入つてよかつた。これで安心して明日の仕事に臨める。忘れ物もないようだし早く家に…

「アウト！ オブ！ 蚊帳！ 私！」

「あつ」

ユウリのことを忘れていた…。

第十一話

朝が来た。爽やかな朝だ。

俺はぐぐつと伸びをする。仕事続きだった俺の体はパキパキと乾いた音を鳴らし、肺の中に飛び込んできた朝の冷たい空気は急速に俺の意識を呼び覚ました。

ボールガイとの一件から二ヶ月、すっかり季節は冬になつた。モノズの牙はすっかり生えそろい、片手で抱えられるほどだつた体は、両手でやつとといつたくらいまで成長した。初めのうちはアレコレ構わず何でも噛みつき往生したものだが、最近は分別もついてきたのかむやみに噛みつかなくなつた。懸念していた俺への噛みつきも、少し歯形が付く程度の甘噛みで抑えてくれている。モノズは物分かりのいい賢い子だと思う。

ガラルの冬はそこまで冷え込むことはないとはい、布団の中で一緒に寝ているモノズの体温は心地いい。何というか、ほつとする温かさだ。

俺はスヤスヤと眠るモノズの横顔を見つめ、ここ数日の間考え続けていたことを頭の中で反芻する。はつきり言つて、これをするには俺は遅すぎたと思う。きっと、遅くてもユウリやホップと共にに行くべきだつた。今の俺は職にも就いている大人だ。そんな大それたことをするのは歳を考えたほうがいいのではないかと思う自分もいる。だか

らこそ決められずにいるのだ。

ピツと、テレビの電源を入れる。鳴り響く歎声。そこに映し出されていたのは去年のリーグ開会式の映像だ。そうそうたる面々が並びスタジアムが熱狂に包まれている。名前も知れないニュースキャスターが熱く語るのは、去年生まれた新チャンピオン。ユウリが、ダンデさんを下し、一本腕を高々と突き上げる映像が流れる。去年の俺が、夢見心地で眺めていた映像だ。これを見るたびに、胸の奥の方がざわざわとした。言葉に使用の無い感情。湧き上がる何かに名前を付けることができず、去年の俺は画面越しの彼女を見つめていた。

でも、今はわかる。モノズがいるから。わかる。ボールガイにボールをもらつた翌日、家の前で戯れるワンパチに恐る恐るでも触れられたあの日から、俺の心の底で渦を巻いていたこの感情がわかる。これは、羨望だ。これは、嫉妬だ。俺は、大人になつた今も、子供の頃のあの気持ちが忘れられないのだ。画面の向こうでポーズを決めるダンデさんを見て、思い描いた強い憧れ。いつかきっと自分もあの場所にと思つた、あの日の心。ポケモンから離れ、いつしか消えてしまつたと思つていたこの感情が、無敵のチャンピオンを倒したユウリの姿に燃り始め、モノズがそれに追い風をくれた。いまや煌々と燃え盛り、熱くこの身を突き動かす感情に、俺は嘘をつけなくなつていた。

「ひい？」

いつの間にか目を覚ましていたモノズが、俺の方を不思議そうな顔をして見上げている。目は見えていないが、匂いで大体の場所が分かるのか、モノズはよく俺の方を見つめてくる。俺はぐしごとモノズの頭を撫でた。撫でて、モノズに語り掛ける。

「なあ、聞こえるか、この歓声が。感じるか、この熱気を」

「がう……」

じつと俺の言葉に聞き入るモノズに、俺は最後の勇気を振り絞つて問うた。

「お前も、あそこに立ちたいか?」

「があ?」

お前はどうだといわんばかりに、モノズは声をあげる。

「俺か、俺は……うん。立ちたい。あの場所に、一人の挑戦者として。だから」

俺に付き合ってくれるか? そう答えるよりも早く、モノズは力強く吠えた。

「ああ……ああ……! 随分遅くなつちまつたけど、お前とならいける気がするよ」

「がう!」

俺はモノズをぐつと抱きしめた。もう迷いはない。あいつらより早く生まれたはずの俺は、怖がつてビビつているうちにいつしかあいつらに追い越されてしまった。だけど、これからだ。これから俺は：いや、俺達は、追いついて、追い越す。

「待つてろ新チャンピオン……! 残念だが二連覇とはいかないぜ」

「……簡単に言つてくれるね」

そして、ドアの向こう側でそれを聞いていたユウリ：チャンピオンは不敵に笑う。
「私たちから誘いに来たけど、いらなかつたみたい」

「ガレキはやるつて信じてたぞ！　トラウマを乗り越えて前よりずつと力強い目をする
ようになつたしな！　すごいぞ！」

「ホップ声が大きい……ガレキにバレちゃうでしょ」

ごつ、とホップにチョップをかまし、ユウリは歩き出した。ガレキにタマゴを渡した
時、こうなることを望んでいなかつたといえうそになる。だが、こうなるとは思つて
もいなかつた。だからこそ胸が躍る。期待で胸が張り裂けそうだ。あの日、自分とホッ
プにサルノリとメツソンを渡したダンデも、こんな気持ちだつたのだろうか。

「新しくジムリーダーになつたビートにマリイ、研究者になつても研鑽し続けたホップ、
リベンジを狙う前チャンピオンのダンデ。それに新しくトレーナーになつたガレキか

……」

ユウリは自分がほくそ笑んでいるのに気が付いた。右手で口元を誰にともなく隠し
ながら、満面の笑みをたたえる。

「ああ、楽しいなあ…！ ビリビリビリビリ魂が震える感じがする…！ 楽しみ楽しみ
でどうにかなりそうだよ！ 早く来て皆！ ここまで登ってきて！」
冷たく澄み切つた朝、熱い戦いの火種はその勢いを急速に強めていく——。

第十二話

「よし、こんなもんかね」

「がう♪」

ざつと荷物をすべてリュックサックに詰めて、俺は一息ついた。旅立ちの決意をした俺は、職場に長期休暇の申請を出した。職場の先輩は少し驚いたような顔をした後、笑って俺の門出を祝ってくれた。元々俺が赴任するまでは隣接したフレンドドリッシュョップの先輩が駅員を兼任していたので、しばらく留守するくらいなら問題ないそうだ。

急な申し出で、何か言われるかと思ったが、先輩は俺が他の子供たちのようにジムチャレンジせずに就職したことを気にかけていたらしく、わがことのようじに喜んでくれた。少しこそばゆいような気持だつたが、俺は明日の開会式に向けて荷物をまとめているわけだ。昨日のうちにネットでの参加申請を済ませたので、今日の夕方の列車で開会式のあるエンジンシティに向かい、ホテルで一泊してから開会式に臨む予定だ。

一応ユウリやホップ、ダンデさんに伝えはしたが、彼らは彼らで色々と忙しい身なので俺はモノズと二人きりでエンジンシティに向かう事に決めていた。

「ちよつと早いがそろそろ駅に向かうか」「があ♪」

モノズに声をかけ、俺達は玄関へと向かう。新しい旅立ちへの第一歩が――

「来ちゃつた♥」「……母さん？」

踏み出す前に母親に止められてしまつた。

「いやーお母さんユウリちゃんたちからガーキんがジムチャレンジに参加するつて聞いてハロンタウンから一番道路スツとんできちゃつたわそれにしてもガーキんもイケズねえどうせならお母さんに言つてくれればよかつたのに照れ屋さんのかしらウフフいつまでたつても変わらないわねあでもポケモン大丈夫になつたんでしょ頑張つたわねガーキんはやればできる子だからいつかきっと大丈夫になれるつてお母さんずつと信じたわほんとよ嘘じやないわだつてガーキんがポケモン克服してジムチャレンジに行くようになつたら渡そうと思つて毎年毎年色々買いそろえちゃつて今家のガレージがもので埋まっちゃつてるので今年買った分は無駄にならなかつたわねお

母さん嬉しいわあイツシユに行つてるお父さんにも電話したんだけどあの人つたら泣いて喜んでたわよあの人もまだまだ若いのねえあでもお母さんもちゃんと泣いたのよそれはそれはもう泣いてしまつて大変だつたのですからねでも泣いてるところをあなたに見せててもどうにもならないからしつかり家で泣いてきてあでもちよつと待つてなんだか涙腺緩くなつてきたわやあねえ歳かしらでもこんな歳でも息子の成長を感じられてお母さんなんだかとつても嬉しいわ元気出てきちゃつたありがとうねえガーケーくんガーケーくんはいくつになつてもお母さんに力をくれるのねこれが親子の愛つて奴かしらお父さんがもしこの場にいたらおいおい泣きながら抱きしめてるわきつとそうよあそういえばお父さんこの知らせを受けて大急ぎでイツシユの仕事終わらせてガラルに帰つてくるんですつて息子の晴れ姿を目撃焼き付けたいそうよあの人も親ばかねえまあそれは私もなんだけどウフフフ似たもの夫婦つてよく言われるもの若いころから私たちは周りにそう言われてたのよねなんだか懐かしくなつちやつたわお父さんと出会つたのは私が武者修行をしてた時なんだけど今の子はそんなことしなくともジムチャレンジつていうのがあつていいわねうん良いと思うわ私素敵よこれは子供はもつと広い世界を見るべきなんだからこうやって世界に羽ばたかせないとねあでもあなたが遅いとは思つてないわ皆それぞれ自分のペースがあるものあなたは今がその時なのよお父さんとお母さんの子なんですものあなたはきっと良いトレーナーになるわ確信

してゐるわだつてお父さんとお母さんの子ですものね」
母さんはそこまで言うと俺の淹れた紅茶を一口飲んで、「美味しいわねえ」と一息ついた。

「ああそうそうトレーナーと言えば昔お父さんが」「まだ話すの!?

思わず上ずつた声をあげて身を乗り出してしまつた。俺の母さん：キルトは、元トレーナーで今は服のデザイナーをしているハロンタウンの住人だ。昔から何かと口数は多いタイプだったが久しぶりに会うとそのあまりの饒舌さにあっけに取られてしまう。この間会つたボールガイもボールの話になると中々舌が回る方だったがここまでではない。母の強さを再確認しながらモノズの方に目をやると初めて聞くタイプの会話文にモノズもぽかんとしているようだつた。モノズは目が見えず耳と鼻の情報の重要さが際立つ分より一層の衝撃を受けていそうである。

「あらやだごめんなさいねガーキン。久しぶりに話すからつい舞い上がっちゃつて」「……いや、いいよ母さん。相変わらずで安心した」

俺はとりあえずソファに座り直して目の前の母さんをじつと見つめた。昔は見上げるばかりだつた母の姿も、いつしか俺の背丈よりも小さくなつてしまつていて、心の中にはともいえない感慨がわいてくる。

「伝えてなくてごめん。でもあれだ、えっと……俺、久しぶりに心の底からやりたいことができたんだ。だから、それをやろうって思つて……でもいきなり母さんに伝えて心配させてもいけないし、それで……」

しどろもどろになりながらも、何とか言葉を探す。自分の口から直接この決意を伝えられなかつたことの言い訳をするように、どうにかそれを言葉にしようとすると、うまく言えない。俺は観念して、パンと両手で頬を張つた。

「……めんよ。母さん。なんだか照れ臭くつて言い出せなかつた」

「……いいのよ、そんなこと気にしないで。お母さんはね、あなたがやりたいって思つたことに一生懸命なところを見せてくれるだけで満足なんですからね」

「母さん……」

「それには」

母さんはすっと手を差し伸べ、モノズを抱き上げた。

「こんなに可愛らしいあなたの友達にも会えたんですもの。それだけでもうお母さんおなか一杯よ。ね？ モノズちゃん」

「があ♪」

「モノズが……噛みついてない……」

俺は思わず目を見開いた。モノズは俺以外が触ろうとすると、慣れない匂いに怯えて

いつも囁みついていたのに。目の前のモノズは何年も一緒に過ごしてきたような穏やかな顔で母さんに喉元を撫でられていた。

「いい子ね♪。温かい子だわ、なんだか触つてるだけで嬉しくなっちゃう。きっと優しい子なんでしょうね…」

「があ、ぎやああ♪」

「ウフフ。本当にいい子ねえ」

……というより、俺と一緒にいる時よりも幸せそうですね。

「凄いな母さん。俺以外にはあんまり懐かないのに」

「お母さんは昔からポケモンに懐かれやすいのよ。あなたはきっと私に似たのね」

そう言つて優しく微笑む母さんの膝の上で、モノズはうつらうつらと船をこぎ始めた。安心しきつてしまつているのだろう、母さんの胸元に体を預けて、いつしかすうすうと寝息を立て始めた。

「ガーケン」

母さんは、モノズの頭をなでながら言つた。

「あなたは、きっと不安なのね。貴方の後ろを追いかけて來ていた二人が、今はあなたのずっと前を行つていて、後からそれを追いかける自分が、二人のいるところに辿り着けるのかどうかわからないんでしよう？　だから、もしそれが叶わなかつたとき、きっと

どうしようもなく恥ずかしいと思つてしまつたから、お母さんやお父さんに伝えられない
かつたのね」

「……」

「でもね。あなたはきっと辿り着けるわ」

「……どうしてそう思う？」

母さんはその問いに、少し困ったようにほほ笑んだ。

「あなたは強い子だもの。一度こうと決めたら、最後までやり遂げられる子だつて知つ
てるもの。あなたは歩みを止めない子、だからどれだけ他の人より歩くのが遅くなつ
て、いつかきっと辿り着くわ」

「母さん……」

「だからあなたもよろしくね。ガーキンを頼んだわ」

「……がう？」

寝ぼけるモノズに優しく語りかける。モノズは眠そうに顔を母さんの服にこすりつ
けるが、母さんはただ微笑んでそれを見つめていた。

「つと、忘れるところだつたわ。お母さんガーキンにプレゼント持つてきたのよ」

「プレゼント？」

「どうか：旅の必需品ね！　はいこれ、キャンプセット！」

ガレキは キャンプセットを うけとつた！

「あー……これは？」

「キャンプセットよ、決まってるじゃない」

「え？ 決まつて……え？」

正直言つている意味がよく分からず聞き返してしまった。何故キャンプの道具が必要なのか。俺は普通にホテルで寝泊まりするつもりだったのだが……。

「ジムチャレンジする人はほとんどみんなキャンプを使うのよ！ 街から街へむかう道すがら！ 夜を旅の仲間と共に過ごすことで絆を深めるの！ 若いっていいわね～」

「え、ええ……。タクシー使つて移動すればいいんじやあ……」

「それだとポケモンが強くならないわ！ トレーナーたちは皆道路の野良ポケモンやトレーナーたちと切磋琢磨して強くなるものなの！」

「そ、そうなの……？」

母さんにしては珍しい熱のこもった弁に思わず気圧されてしまった。元トレーナーの母さんが言うのだから間違つては無いのだろうが……何故キャンプ……。

「あつそうだ、これも渡しておくわね！」

ガレキは 傷ぐすりと状態異常回復セットを うけとつた！

「それとこれも！」

ガレキは モンスター・ボール×10を うけとつた！

「これも外せないわよね！」

ガレキは スマホに図鑑を インストールさせられた！

「あとはお小遣いと……」

「いやお小遣いはいいよ母さん……」

このまま受け取り続けると永遠に続けられそうな気がしたので思わず制止する。
というか一応定職についている身としては親からの小遣いは少しばかりやるせない気持ちになつてしまふので受け取るわけにはいかない……。

「そう？ なら仕方ないわね……そうだ、これだけでも受け取つて！」

ガレキは カレー・セットを うけとつた！

「…………は？」

今日一番間の抜けた声をあげる俺。何故カレー？ 何故？ 何故なんだ？

「ジムチャレンジと言えばキャンプ、キャンプと言えばカレー！ これはもうガラルの新常識なのよ。ジムチャレンジをする人たちは皆カレーを作れるわ」

「えつ、いやなんで？ どういう理屈で……？」

「カレーはカレーよ！ ポケモンたちもみんなカレーが大好きなんだから！」

「えつ、いやそれ初耳なんだけど」

突如として明かされた謎の新常識に思考が追い付かないが、母さんの曇りなき眼を見るにどうやらマジで言っているらしい。

「ダンデくんもソニアちゃんもホップくんもユウリちゃんもジムチャレンジしてた頃はみんなキャンプでカレーを作つてみんなで食べてたのよ！」

「ここはインドだつた……？」

あまりのカレー侵食に思わず文献にのみその姿を残す伝説のインド象の住まう幻の地を連想するが考え直してもやはりここはガラルだ。ガラルは俺の知らない間に香辛料に支配されてしまつていたらしい。ガラムマサラの雨でも降つたのだろうか。

「いつの間にこんなことに……」

「ちなみにユウリちゃんはジムチャレンジ時代三食カレーで食いしんボブのお店に行つた時もステーキを頼まずカレーを注文したらしいわ」

「新手の拷問？」

思わずそう聞き返すが母さんは「？ 普通のことだと思うけど……」と首を傾げた。畜生。どうなつているんだ。どうなつてしまつたんだガラルは。

「ま、まあ受け取つておくよ……」

ひきつった笑顔でカレーセットを受け取り鞄にしまう。カレー……俺のあざかり知らないところでこんな恐ろしい事が起きているとは思わなかつた。俺はこの旅の中で

カレーの真実に迫つたり迫らなかつたりするかもしね。

「良し、じゃあもう忘れ物はないわね？ 着替えと財布は持つた？ 折り畳みの自転車もちゃんと鞄に積んでるわね？ キャンプセットも抱えてるし：準備はバツチリね！」
「うん…キャンプのテントとカレーの鍋が思いのほか俺の腰を攻めに来るけど何とか持てたよ母さん」

なんだか旅立つ前からだいぶ足腰が限界に近いが最近の若い子たちはこんな重装備でガラルを旅しているのか。末恐ろしい話だ。そのうち若者が皆ワンリキーミたいになつてしまふかもしれない。ワンリキーミみたいな体形の子供たちが笑顔でカレーを貪り食う絵面を想像して背筋にうすら寒いものが走るが今は考えないようしよう。とにかく明日の開会式に向けてエンジンシティに向かわなければならぬのだ。

「じゃあ…行つてくるよ」

「うん、いつてらっしゃい」

何年ぶりかのそのやり取りで、俺は少しだけ懐かしい気持ちに包まれながら、新しい日々への第一歩を踏み出した。

第十四話

ユニフォームに袖を通す。白を基調としたシンプルなデザイン、ジムチャレンジャー規定のユニフォームだ。この服を着ると、今まで曖昧だったそれが、強い実感となつて体にのしかかってくる。俺は、ガラルリーグに挑むのだ。

スタジアムの方から割れんばかりの歓声が聞こえる。選手控室にひしめき合うジムチャレンジャーたちは個人差こそあれ皆一様に緊張した面持ちで佇んでいる。無理もない。他の地方のリーグと違いガラルリーグはガラル地方をあげての一大イベント、開会式の様子はガラル全国に放送されるわけだし、二十歳に満たない若者が殆どを占めるジムチャレンジャーが緊張するのも分からぬではなかつた。

……ただ、俺はというと緊張よりなにより気になりすぎるものがちらちらと視界にちらついていて落ち着かない。これはアレだろうか、話しかけたほうがいい奴だろうか。というか周りにいるジムチャレンジャーもあまりの異様さに引いてしまつてているのか、人混みの中そこだけ空間ができるていてやはり近づきたくない。無視しようか。無視するのがいいかな。いいよな。ヨシ無視しよう開会式に集中するべきだ。

「あつガレキじやないボルかゝ奇遇ボルね！」

「あーすいません人違いですね」

すっと顔を逸らし人混みに紛れて壁の方に逃げる。俺はあまり目立たない方なので完全に逃げ切れたと思ったが俺は肩をがつとつかまれた。

「あはははは、そうそう見間違えたりしないボルよ 記憶力には自信がある方ボル」

「やつぱりあの時のボールガイかお前……」

複数人いると聞いていたから別人だと思ったがこの口ぶりからするとどうやら間違いなく俺にプレミアボールをくれたボールガイのようだ……。確かやたらとリアルな体型の着ぐるみで誤魔化されているが中は普通に長身の女性だつたと思う。だが何故ボールガイがここに。

「おまえどうしてここに居るんだよ……ここはロビージやないぞ？」

「あはは、今日はそういう用事じゃないボルよ。ボクたちをリーグ公認のマスコットにしてもらおうと色々画策してたんだボルがチャンピオンに取り入ろうとしてた時に「取り入るくらいならリーグに出て貴女がチャンピオンになつたらいいんじやない？」って言われたんだボル」

「いやそれではいそうですねつてリーグに出ようとする辺りお前の行動力どうなつてんだ……」

「褒めないでほしいボル照れるボルよ」

「褒めてはないかな……」

相変わらずで安心したが俺もこのやばい奴の仲間だと判断されたのか周りからひそひそとささやく声がする。俺はこんな変な球体をかぶつた変人の仲間ではないと説明しようとしたところで、ボールガイは俺に話しかけてきた。

「ガレキこそジムチャレンジするんだボルね。意外ボル！」

「……まあ、なんだ。俺も色々あつたんだよ」

「そうなんでボル？　まあ何かにチャレンジすることはいいことボル！チャレンジ精神はいつだって大事ボルからね！」

「お、おう。ところでその変な喋り方ずつとやんのか…………？」

「ボールガイである以上この格好とこの口調は不变ボルよ！」

「そ、そうか……」

ボールガイは色々決まりがあるらしい。よくわからないが大変みたいだ。夏場とか苦しそうだし。

「まあボクはガンテツじいさんのために頑張るボルよ。ガレキも頑張るボル！」

「おう、お互いな」

元気よく向こう側へ走つていくボールガイをひらひらと手を振つて見送る。控室でもガンテツボールを布教するつもりのようだ。懲りないというかなんというか……。

「ジムチャレンジャーのみなさん。時間になりましたので背番号の昇順に並んで順番に入場してください」

と元気に布教して回るボールガイの背中を見つめているとスタッフに声を掛けられる。どうやら出番の様だ。まあ出番と言つても俺達チャレンジャーはぞろぞろと入場して選手宣誓を行い、その後のジムリーダー入場を見届けてチャンピオンの開会挨拶を聞いたら退場して終わりという簡単なものだ。一種のにぎやかしみたいなものである。気負うこともない……と自分に言い聞かせてみるが少しドキドキする。いつも画面越しに眺めていたグラウンドに今から自分が立つのだと思うと浮足立つような気持になる。

俺はすうと大きく息を吸い込んで吐き出した。腰のホルダーにセツトしたプレミアボールにそつと手で触れて、前のチャレンジャーの後について歩きだす。

『——それでは選手、入場です……』

第十五話

「ツ……」

スタジアムに浴びせられた無数のライトに思わず目がくらむ。足を止めそうになるのを堪え、前のジムチャレンジャーに続いて歩みを進める。

「……すげえ」

次第に目が慣れていくにつれて視界に飛び込んできたのは満場のスタジアムだ。飛び交う声援。視界を鮮やかに彩るレプリカのユニフォームの群れ。観客席からはひしめき合う人々の熱狂がここまで届いてくるようだ。頭が割れてしまいそうなほどの歓声の渦に、今自分がどこにいるのかを改めて実感させられる。

指定された位置に立ち、しつかと二本の足でグラウンドを踏みしめた俺はごくりと生唾を飲み込んだ。すさまじいプレッシャーだ。

：と、ジムチャレンジャー全員が出そろつたところで、司会の男はひときわ大きな声を張り上げる。

『さあ、勇猛果敢なる若きチャレンジャーたちを迎撃つはガラルリーグの誇る八人のジムリーダー達だツツ』

吹きあがるスマーキ。ゆつたりと、けれどしつかりとした自信に満ちた足取りで、俺達の出てきたのとは逆のゲートから八人の人影が現れた。ガラルリーグのジムリー
ダー達、これから先俺達が戦うことになる歴戦の英傑たちだ。

『前回リーグから二つのジムがそのリーダーの座を譲り、アラベスクタウンジムのビート！　スパイクタウンジムのマリイの両名を加え新たなる時代の到来を思わせる今回のジムチャレンジであります！　前年度のジムチャレンジで目覚ましい活躍を見せた両名のジムリーダーとしての戦いに熱い期待が寄せられます!!!』

司会の言葉に、観客の熱狂はさらにヒートアップする。彼らも皆、新しいジムリー・ダーの活躍を心待ちにしていたのだろう。もはや収集などつかないのでないかと不安になるほどの大騒ぎだ。

聞け

だが、その熱狂は一瞬にして静寂へと変わった。ガラルでこの一年を過ごしたものならば、誰もが知っているあの人物が姿を現したからだ。それは、俺のよく知る普段の彼女とは比べ物にならない存在感でそこに立っていた。

「伝説は終わつた」

マイクを手に、マントをはためかせながら彼女は歩みを進める。

『先代チャンピオンによる十年間の不敗神話、チャンピオンタイムは終わりを告げた』

踏み出すその一歩一歩から確かな自信が伝わってくる。

『私が終わらせた』

スタジアムの中心に立ち、彼女は続けた。

『元よりこの世に「永遠」はない。走り出した列車がいつか止まるように、沈まない陽が無いように、あれはいつか訪れた終わりだ。避けられぬ宿命だつた——』

静かに、嘆き締めるように告げる。スタジアムは静まり返り、吹き抜ける風の音だけが響く。その静寂を破つたのは、他でもない彼女自身だ。

『だがそれは嘆き悲しみにくれる「終わり」ではない！　列車はまた走り出す！　陽はまた昇る！　あの日の敗北、あの日の勝利は新たなる時代の「始まり」の狼煙だ！　あの日！　あの時！　チャンピオンの座は！　ガラルに燃る無数の猛きトレーナー達の頂点は受け継がれた！』

大きく手を振り、体全体で辺りを見渡しながら、彼女は叫ぶ。グラウンドに立つ選手だけでなく、それを見つめる観客すら鼓舞するようにな。

『我こそはと思う猛者よ！　その爪を！　その牙を！　研鑽せし挑戦者たちよ！　私に食らいついて見せろ！　かつて私がそうしたように、私の元からチャンピオンの座を奪い取つて見せろ！　新しい歴史を！　他の誰でもない自分自身のその手で切り拓きたいというのなら！　私のチャンピontimeを!!　止めて見せろ!!』

高く拳を突き上げ、彼女は叫んだ。キイインとマイクのハウリングが響く。

静まり返ったスタジアムの中、ユウリはスタジアムに張り詰めた緊張の糸を解きほぐすように不敵に笑い、言い放つ。

『出来るものならな』

真っすぐ突き出された彼女の手からマイクが落とされるのと同時に、スタジアムは今日一番の大歓声に包まれた。